がらりきみの心で定史たび



紀美野町の成り立ち

紀美野町は、平成18年(2006年)1月1日に野上町・美里町が合併してできた町である。野上地域は、石清水八幡宮の所領である野上荘として存在し、野上八幡宮を中心として歩んできた。江戸時代に入ると、紀州徳川家領地となり、領主の狩場や休憩所が設けられていたと言われている。野上八幡宮には、昭和2年(1927年)まで多宝塔が立っていたが東南院(奈良県吉野町)に移築されている。また、八幡宮には祭礼具などの神事に関するものとともに経典や仏具などの仏教にかかわるものも伝えられており、野上荘の繁栄がうかがえる。また、小川地区の一部及び志賀野地区は、高野山領地として高野山真言宗文化が残る地域である。

美里地域は、平安時代、康治2年(1143年)に描かれた紀伊国神野真国荘絵図にあるように、上皇をはじめとする朝廷有力者の荘園から神護寺所領となり、その後、隣接する国吉地区および長谷毛原地区とともに高野山領地となって明治の廃藩置県まで存続してきた。従って、高野山真言宗に係る寺院や神社が数多く存在している。

このように紀美野町の歴史は、中世の荘園から成り立っていて中央政権との深い繋がりがあった地域と思われる。

ぶらりきみの山 歴史たび

志賀野地区

| No. 施設名 | 掲載頁 |
|-----------------|-----|
| ⑰ ノダフジの大樹 | 12 |
| 18 釜滝薬師(釜滝山金剛寺) | 13 |
| ⑲ 志賀野丹生神社 | 13 |
| ② ブドウハゼの原木 | 14 |
| | 15 |

東野上地区

| | No. 施設名 | 掲載頁 |
|---|-------------|-----|
| | ② 野上八幡宮 | 18 |
| Ī | 28 若山牧水と石本邸 | 18 |

至 紀の川市

国木原GC-

紀美野町役場

のかみふれあい公園(10

和歌山県動物愛護センター

至 海南市

野上八幡宮

国保野上厚生総合病院

総合福祉センタ

(370)

18 21)

> 美里支所 文化センター

20

農村総合 センター

12

10

小川 八幡神社

23

小川地区

| No. 施設名 | 掲載頁 |
|----------------|-----|
| 22 小川八幡神社と大般若経 | 15 |
| ② 中田の棚田と竜王水 | 16 |
| 25 生石山 | 17 |
| 26 生石信仰 | 17 |

県立自然公園 生石高原

至 有田川町

その他

26)

| No. 施設名 | 掲載頁 |
|-------------|-----|
| 29 ヒダリマキガヤ群 | 19 |
| 32 八町地蔵 | 22 |
| 33 野上電気鉄道 | 23 |

真国地区

16

| No. 施設名 | 掲載頁 |
|----------------|-----|
| ⑭ 勝谷峠(アカホヤ火山灰) | 10 |
| 15 真国丹生神社 | 11 |
| 16 不動の滝 | 12 |

至 かつらぎ町

14

。 みさと天文台 の り り り

美里の湯 かじか荘

長谷毛原地区

| No. 施設名 | 掲載頁 |
|--------------|-----|
| ① 泉福寺 | 4 |
| ② 丹生狩場神社と大日寺 | 4 |
| ③ 立岩 | 5 |
| 4 長谷丹生神社 | 5 |

神野地区

| No. 施設名 | 掲載頁 |
|----------------|-----|
| 8 十三神社 | 7 |
| 9 箕六弁財天社のカツラの木 | 8 |
| 10 南福寺 | 8 |
| 11 満福寺(神野寺) | 9 |
| 12 玉泉寺 | 9 |
| ③ 遍照寺弘法大師画 | 10 |

国吉地区

| No. 施設名 | 掲載頁 |
|------------|-----|
| 5 熊野神社と惣福寺 | 6 |
| 6 上南家 | 6 |
| ⑦ 弥市良の墓 | 7 |







泉福寺は、かつらぎ町新城と紀美野町長谷宮との境に位置する。寺伝によると、創建は安永4年(1775年)という。本尊は十一面観音で鎌倉時代の作である。

長谷丹生神社より移された梵鐘には、「安元2年(1176年)2月6日 勧進入唐三度聖人重源 願主尼大覚」 の銘があり、東大寺再建に尽力した僧、重源に関わるものであることがわかる。

また、「この鐘、妙音にて人に幸を呼び、耳の病、たちまちに治る」と伝えられており、耳の観音さんとして信仰されている。 県内最古の梵鐘で、国の重要文化財に指定されている。

本堂の左側の下り坂に沿って、日清戦争、日露戦争、第二次世界大戦で戦死された、新城、長谷、毛原地区の方々の霊を弔う墓碑が200以上も立ち並ぶ。これらは地域のある人が寄進されたものである。故郷を遠く離れた地で戦死された人々の霊を懇に弔うとともに、不戦と平和を希求する心情が偲ばれる。

参道を登った左側には、水子地蔵がある。子どものような優しい顔立ちの地蔵さんで、この世で生を受けなかった子どもや幼いうちに亡くなった子どもを賽の河原で救ってくれるという。初午は、餅まきや厄年の人の参拝で大賑わいする。

② 丹生狩場神社と大日寺

長谷毛原



丹生狩場神社は毛原荘の総氏神であり、祭神は丹生・高野(狩場)両明神である。神社の敷地内で隣接する真言宗大日寺は、本尊不動明王ほか阿弥陀如来座像(県指定文化財)などを祀る。

明治までは、このように神社の敷地にお寺が同居する「神宮寺」が珍しくなかったが、 新政府の「神仏分離政策」によって、多くの お寺が神域から隔離された。

理由は分からないが、ここは伝統的な「神宮寺」の形が残され、寺社一体で運営されて

いる。神社では20年に一度の上遷宮があり、余興として現在は「幟上げ」がおこなわれている。江戸時代には、 奈良県天川村から能楽の一座を招き上演したとの記録が残されている。





毛原宮の貴志川に鎮座する巨岩「立岩」には、昔から地域で言い伝えられてきた逸話がある。 その昔、毛原郷の人々が、田畑を荒らすイノシシの害に苦しみ、領主の天野丹生明神に訴えたところ、天野から「狩場明神」が派遣されてきた。彼は犬飼谷(いぬこだに)で巨大なイノシシを発見し矢を射かけたが、イノシシは牙をむいて襲いかかってきた。さすがの名ハンターもその勢いに押され、貴志川に横たわる大岩の上に身を避け、「汝心あらば我を助けよ」と念じたところ、横たわっていた

岩が轟音とともに起き上がったのである。なおも飛びかかろうとするイノシシに向かって、岩上から狩場明神の放った最後の一矢は見事怪物イノシシを射貫き、毛原郷に平和が戻った。以来、村人はこの岩を「立岩」(たちいわ)と名付け、毛原郷の鎮守社「丹生狩場神社」を、親しみと敬愛を込めて「狩場さん」と呼びならわしている。

紀伊続風土記には、毎年霜月の十六日夜に、天野社から神主が来て、道ばたの石の上から立岩に向って祝 詞をあげたとある。

4 長谷丹生神社

長谷毛原



丹生神社は長谷宮と新城地区の氏神である。 永享2年(1430年)の旧神職中家文書には、 長谷大明神に寄付田状の文書がある。したがっ て、室町時代初期には氏神として祭祀されて いたと思われる。

紀伊続風土記によると、丹生神社は「丹生高野両大明神社」と表記されており、「本社両殿…庁…観音堂 観音寺 釣鐘堂 末社四社」という社殿の説明に続いて、「長谷荘の五ヶ村の氏神で…社殿ははなはだ壮麗である。…瑞籬(みずがき)の内に銀杏の大木がある。周

囲は一丈三尺ばかりで枝にすりこぎのようなものが幾筋か垂れ下がっている。長いものは一尺五寸ほどである。… (観音寺の) 観音は…古仏である。」などと記されている。

明治の神仏分離令によって、観音堂と釣鐘堂は取り除かれ、梵鐘は泉福寺へ移された。しかし、境内にそびえる県指定天然記念物の大銀杏(幹囲 5.5m、樹高 22m)は、長年の風雪により枝葉が折れ散っても、今も変わらず黄葉し、人々への大きな励ましとなっている。



ぶらり・きみの、

⑤ 熊野神社と惣福寺







[宝篋印塔]

[惣福寺]

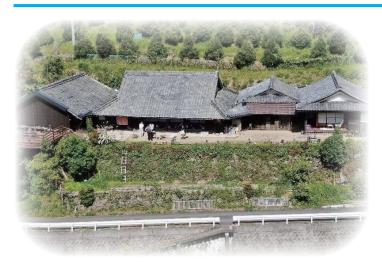
熊野神社は、猿川荘 (現紀美野町田他6字) の総氏神として奉斎されてきた神社であり、祭神は伊邪那美命・速玉男命・倉稲魂命である。 地域の伝承によると、平安時代初期の征夷大将軍であった坂上田村

[熊野神社]

麻呂が矢竹に適した「片芽竹」を探し求めて当地を訪れその後3年間滞在したが、この地を離れるに際し猿川荘の守護神として熊野より勧請したのが熊野神社の始まりといわれている。境内には、坂上田村麻呂を偲ぶものとして「将軍塚」と呼ばれる県下最大級の宝篋印塔(県指定文化財)や、坂上田村麻呂のお手植えと伝わる「将軍桜」(現在4代目)がある。また、本殿脇の見事な「夫婦杉」などの大木があり、古社であることを物語っている。かつては、春は桜の名所として、また秋の例大祭には馬駆けがおこなわれ賑わった。隣接する惣福寺の内陣には多くの仏像が祀られており、荘内一円の菩提寺である。

6 上南家





平成30年(2018年)に紀美野町初の文 化庁登録有形文化財の指定を受けた住宅で、 山地斜面の細長い敷地に貴志川上流域の伝統 的な山間農家の構成を残す4棟の建物が並ん でいる。

主屋(母屋)は江戸時代中期の建築で、軒や天井が低くて床の間や仏壇・天井に古い様式を残し、栗材を使った柱や鴨居には鉋(かんな)ではなく釿(ちょうな)で削った跡がある。ヒヤ(離れ座敷)はコナシヤ(納屋兼作業棟)とともに昭和32年(1957年)頃に

造られた戦後期和風建築で、縁側の板に貴重な榧 (かや) 材が使われているのはこの地域ならではの特色である。もう 1 棟の長屋門は江戸時代後期の建築で、主屋にない炊事場・風呂・物置などの生活施設がある。 現在、上南家住宅は建築当時の雰囲気を残したまま古民家の宿「うえみなみ」として活用されている。

⑦ 弥市良の墓

国吉



安永5年(1776年)に起きた高野山寺領 の百姓一揆(高野騒動)を指導した菅沢村庄 屋弥市良の墓。

この年、領主高野山に、領内百数十ケ村の 農民3000人が年貢軽減を求めて押しかけた。 高野山は、いったん要求を受け入れたものの、 これでは寺領の経営ができないと幕府に上訴 した。

幕府は翌年、関係者数十人を江戸に召喚し、 その中の村庄屋3人を含む計8人(いずれも 美里地区の農民)を、一揆の首謀者と断定し「獄

門」の判決を下した。しかし、うち7人は獄中で死亡し、実際に処刑されたのは、猿川庄の菅沢村庄屋弥市良(当時 52歳) だけであった。

弥市良の首は、幕府の役人が付き添って郷里である菅沢村まで運ばれ、「アサナ踏抜(ふみぬき)」という 往還で「さらし首」となったと古文書に記録されている。「踏抜」の場所は不明であるが、美里の湯かじか荘 対岸に「獄門田(ごくもんだ)」の地名が残っていることから、弥市良との関係がうかがえる。

この墓は、平成15年(2003年)に発見されたが、本来ある筈のない「反逆者の墓」がどうして存在するのか、研究者やマスコミの話題となった。

8 十三神社

神野



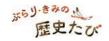
「和歌山県の文化財」P.13 から引用

十三神社の名称は、国土を守護する神様といわれる國常立尊をはじめ、13の神様が祀られていることが由来である。創建は延暦3年(784年)とされる。

本殿、摂社丹生神社本殿、摂社若宮八幡神 社本殿の3棟の社殿が国の重要文化財に指定 されている。いずれも天正年間(1573年~ 1592年)かそれ以前に建立されたもので、 桃山時代の社殿建築様式を今に伝える貴重な 遺構である。

毎年、秋祭りが盛大におこなわれ、昔は馬 駆けや獅子舞が奉納され賑やかであったとい

われている。現在もその祭りは継承されており、毎年 10 月に獅子舞の奉納、稚児行列や上之御所へのお渡りが行われる。地元有志が舞う天狗と獅子の息の合った舞は必見である。



⑨ 賞六弁財夫社のカツラの木

箕六弁財天社は、山奥にひっそりと佇む、築杵嶋姫命を祀る小さな神社で、仁和2年(886年)頃に広島の厳島神社から弁財天を分祀されたと伝えられている。緑に囲まれた神社は神秘的な雰囲気が漂う。

本殿のすぐ後ろには、幹囲8 m、樹高30 m、推定樹齢500 年のカツラの巨木がそびえ、和歌山県の天然記念物に指定されている。

神社までの道はわかりづらく、神社に向かう狭い車道を進むと 行き止まりになる。その手前を石標に従い山道を登ると神社に着く。



10 南福寺

神野





かつて南福寺の東南の峯にあった伽藍が廃寺となり、弘法大師の作と伝えられている本尊薬師古仏がこの寺に移されたという。現寺院は嘉永 4 年(1851 年)の棟札から加茂谷(海南市下津町)の宮大工、野坂七 左衛門が建立したことがわかる。

本堂は方三間で、欅材が多用されている。向拝の虹梁の木鼻は見事な文様の象鼻が透し彫りされていて、 内陣や外陣は虹梁が多用されている。これらの意匠は、野坂七左衛門が手がけた根来寺大門にも見られる。

厨子の上の扁額「峯の薬師・・・・・高野山座主、大僧正密幢」書がムササビにより破損した。また、本尊と他の仏像は盗難されて不在である。

がらりきみの人歴史たび

歴史たび

① 満福寺 (神野寺)



満福寺は、建保元年の某池田宛行状によると、為光上人が宝亀元年(770年)に開山したとある。

為光上人は、唐からの渡来僧とされる人物で、紀三井寺(和歌山市)や禅林寺(海南市)を開山されたともいわれているが、実態は不明である。

堂内には、為光上人像や十一面観音立像・ 四天王立像等の仏像が多く安置されている。

十一面観音像は、奈良時代の特徴を有することから、奈良時代の作である。

満福寺では、毎年の初午で大般若経の転読や餅投げ行事がおこなわれている。

12 玉泉寺



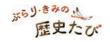


玉泉寺の庇(ひさし)柱には、「七番札所玉泉寺」の墨書がある。また、向拝の虹梁(こうりょう)には象鼻文様が施されており、鰐□には「文明9年(1477年)7月4日」の刻銘がある。堂内の薬師如来像は左手に薬壺を持ち、右手は掌をこちらへ向け、衣文はゆったり流れる様相である。その他、聖観音、不動明王、毘沙門天像などが安置されている。

紀伊続風土記によると、「本尊の薬師如来は 明恵の作で、乳を与え安産をさせるというと いうことで人々が信仰している。」と記されて

いる。このお薬師さんは、今でも鉦(かね)の緒をちぎって腹に巻く習いで、多くの女性が訪れるという。本堂の裏に四国八十八ヶ所の巡拝記念碑が立つ。石碑の前に、それぞれの寺の砂を埋めているため、一つずつ参拝すれば八十八ヶ所を順拝したのと同じご利益があるという。これを「お砂踏み」といい、大師信仰が息づいている。





③ 遍照寺弘法大師画







遍照寺の本尊である弘法大師の肖像画。向かって左を向き、 右手に五鈷杵(ごこしょ)、左手に念珠を持ち牀座(しょうざ) に座る姿は、「真如様(しんにょよう)」と呼ばれる正統的なス タイルである。画像上部には、丹生高野四社(丹生明神・高野

明神・気比明神・厳島明神)を表す梵字が記されている。このように弘法大師と4人の神が描かれ、その四社明神すべてが梵字で表されている作例は珍しい。

制作時期は南北朝時代にさかのぼるとみられる。高野山周辺地域では、中世まで歴史をさかのぼれる画像・彫刻の残存事例が少ないため、非常に貴重である。特に、この画像は、その中でも最古のものと考えられている。 日頃は、和歌山県立博物館に保存されており見ることはできないが、春の彼岸(春分の日)には遍照寺に戻り、 法要がおこなわれる。

⑭ 勝谷峠 (アカホヤ火山灰)

真国



近くに火山のない紀美野町だが、勝谷峠には珍しく火山灰の地層が見られる。これは「アカホヤ火山灰」と呼ばれる火山灰層で、およそ7300年前に鹿児島県薩摩半島の南約50kmの海中にあった巨大カルデラ火山が大噴火したときの火山灰が偏西風に運ばれてきて降り積もったものである。

このアカホヤ火山灰は東北地方にまで達し、 縄文時代の人々の生活に大きな影響を与えた。 そのため、このアカホヤ火山灰の地層は考古 学上で縄文時代の早期と前期を区分するひと

つの指標とされている。

なお、縄文時代早期の日本列島の総人口はわずか 10 万人台と推定されているが、紀美野の地域にはすでに人が住んでいたことがいくつかの遺跡の存在によって裏付けられている。

だりきみの人歴史たび

真国

15 真国丹生神社



紀伊続風土記によると、神官家の文書に 鎌倉時代末期の正応という年号がみえることから、真国丹生神社は鎌倉時代には既に 存在していたと考えらえる。また、戦国時代、江戸時代初期には衰退していたが、慶 安3年(1650年)に高野山僧によって復興されたとの説もある。現社殿は明治16年(1883年)に再建された。祭神は丹生都比売命、熊野坐神などである。

この地域で数百年前から続く祭事の一つ に「御田の舞」がある。苗代作り、種まき、 田植え、稲刈り、倉入れの農作業の所作を

舞で表現したもので、毎年2月に催される。現在は、地元高校(りら創造芸術高等学校)の生徒により継承されている。

神社は県道沿いの大鳥居から坂を上がると社務所に着く。広場があり、かつては神に五穀豊穣の祈願や秋の豊作を感謝して、神楽を舞ったり、御酒を捧げたという。秋祭りには餅まき、神輿などで賑わう。

石段を10段程上ると、一対の灯籠には「丹生高野大明神 安政3年」、右の手水鉢には「文化8年 初生谷村」と刻まれている。また社殿前の灯籠には「安政5年」、手水鉢には「天明5年 真国荘中」と刻まれている。 灯籠や手水鉢に刻まれている文字から真国荘の人達が丹生神社に貢献していたことがわかり、そこから信仰の強さがうかがえる。また、石段の登り口の楠の巨樹、社殿前の杉の大木がしっかりと根を張り、神域を守る。



「中世の村をあるく」P.120 から引用



「美里ななくさ」P.48 から引用



16 不動の滝

不動の滝は、紀美野町には数少ない滝で、名のとおり不動明 王が祀られている。落差は30mほどあり、水量は多くはないが、 静かな谷あいのきれいな岩肌をまっすぐに落下する。

不動の名のつく滝は各地にあって、真言宗など密教の滝行で 不動真言を唱えることと関係があり、この滝もかつては滝行場 であったと思われる。地元の人によると、戦後の一時期には籠 り堂を営んでこの滝で行をしていたお坊さんが居たようであ る。

この滝から少し離れたところには「天狗岩」がある。岩崖の上に握り飯のような形の岩が乗っかっているように見えることから「天狗の握り飯」とも呼ばれ、「滝さん(不動の滝)」とともに地域の人々に親しまれている。



17 ノダフジの大樹

志賀野

ノダフジは、ツルが右に旋回(時計回り)して上昇しているの が特徴の樹木である。

このノダフジの大樹は、推定樹齢 200 年、元ツルの下方がほぼ 三角状になっており一辺が約 70cm、幹囲 230cm に及ぶ大樹である。県下最大のノダフジで昭和 41 年(1966 年)に和歌山県の天然記念物に指定されている。

近年では、樹木の衰えが著しく花の数も少なくなりつつあるが、 かつては紫色の花を多く付け、人々の目を楽しませた。



18 釜滝薬師 (釜滝山金剛寺)

志賀野



釜滝薬師縁起には、「天長 12 年 (835 年)、 慈覚大師が一刀三礼の薬師如来像を安置した」 とある。その後、兵火によって寺院が焼失し 衰退したが、高野山の高僧快応が苦難の末、 宝暦 3 年 (1753 年) に再建した。

紀伊国名所図会によると、「本尊薬師如来は 霊験が殊にあらたかで、諸病を取り除こうと いう(薬師如来の)誓いに与ろうとする人々 の往来が途絶えることがない…とくに眼病の 人々があつく信仰し、…一心に祈念すれば十 中に八、九は平癒しないことがない…」と記

されており、目のお薬師様として信心されてきた。今でも訪れる人が多い。

本堂は方三間、柱はすべて欅材でできている。入口の虹梁の木鼻には獅子の彫刻があり、中備の蟇股(かえるまた)も巧みな文様が施されており、天井の釣灯籠は真っ昼間のようにまばゆい。正面の金色をあしらった厨子には、真中に薬師如来、左右に日光、月光菩薩、十二神将が在す。天井近くの欄間には十二支の彫刻が施され、外側にも四季の花の彫刻がある。

本堂右の護摩堂には明治の神仏分離令で勝福寺から移された大日如来像や不動明王、弘法大師が安置されている。他にも、梵鐘、灯籠、擬宝珠(ぎぼし)、柱の裾の金具、欄間の彫刻、美術工芸等、興趣あるものが多い。

19 志賀野丹生神社

志賀野



丹生神社の創建は不詳であるが、前社殿造営の棟札が文保元年(1317年)の鎌倉時代であることから、この頃すでに祭祀されていたと思われる。

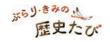
享保7年(1722年)の御宮二社造りの注 文書や元禄、宝暦、天明3年(1783年)の 遷宮の記録などがあり、宮大工の明細書、使 用した用材、金具、彩色などを知る上で貴重 な文書である。また、大般若経415巻も所蔵 している。

本殿には、丹生都比売命、誉田別命、皇大

神、市杵島姫命その他四神が祀られている。また、本殿のずっと右端には大きな杉(学術推せん樹、推定樹齢 400 年、幹囲 5.3m、樹高 43m)がそびえている。幹に頬をつけると神木の精気にあやかれるとか。

祭礼は春夏、秋冬に催し、豊作と息災を祈願する。とりわけ秋祭りにはりら創造芸術高等学校の生徒による伝統芸能の獅子舞や子ども神輿が大賑わいで祭りに彩りを添えている。





20 ブドウハゼの原木





和歌山県史跡名勝天然記念物調査報告書第十三輯(昭和9年刊)によると、天保年間(1830年~1844年)に、房が長く極めて美しい大きな実をつける一樹の櫨が志賀野村で発見され、「ブドウハゼ」と名付けられた。ブドウハゼは、原木から穂木を取り台木に接ぎ木をして育てられる。

一般に櫨の実から抽出される櫨蝋(はぜろう)は主に和ろうそくの原料となるが、特にブドウハゼの実からとった蝋油は色味が良いうえに、ススが少なく良質であったため、その名は全国に広がり各地から穂木や種実の注文があったという。紀美野町においても志賀野村を中心に明治から昭和初期にかけてブドウハゼの栽培が盛んとなり地域経済を潤した。

昭和9年、この貴重な木を保存するため「葡萄櫨の原木」として和歌山県の天然記念物に指定されたが、昭和33年(1955年)に指定が解除されていた。平成29年(2017年)に地元高校生らによって竹林の中で見つけ出された木は、以前指定されていた「ブドウハゼの原木」であることが分かった。令和2年(2020年)、この原木を保護し後世に伝えていくことが必要であるとして和歌山県の天然記念物に再指定された。原木の幹囲約158cm、樹齢170年以上と推定されている。

② 釜滝の甌穴

志賀野



甌穴(おうけつ)は、山あいの川床のくぼみに入った石が水流で回転して、長い年月岩盤を削ってできた壷形の穴である。真国川にある釜滝の甌穴群は、昭和46年(1971年)年に和歌山県の天然記念物に指定されている。十数個以上ある釜滝甌穴のうち最大のものは、直径1.5m、深さ3.6mもあるという。

江戸時代に紀州藩が編纂した「紀伊続風土記」には釜滝という地名がこの甌穴にちなむことが記されている。「釜」は甌穴のこと、「滝」は今日ではもっぱら崖を落下する水流をいう

が、もともとは急流を指す語で、釜滝とは「甌穴のある急流」という意味である。

用字は異なるが上神野地区の鎌滝(かまたき)という地名の由来も同じで、やはりいくつもの甌穴群がある。

② 小川八幡神社と大般若経

小川





「中世の村をあるく」P.172 から引用

小川八幡神社は、現在、吉野・福井・坂本・梅本・中田の5地区の氏神で、古文書(小川八幡神社所蔵文書)によれば「欽明天皇の御宇(540年~570年)宇津尊嶋より、大和の国比木嶺に移り給い、それより紀伊の国名草郡辺に移り給う、その後紀伊の国生石山の麓下、小川に宮造する」とあり、大己貴命(子宝・安産・商売繁盛・開運)、少彦名命(医薬の神・万民の病難を救う霊力の神)の2柱を生石神社として祀られた。

また、古文書によれば「その後、一条院の御宇(987年~1010年)石清水八幡宮の別宮となり、放生会その他の神事は石清水八幡宮の例祭に准ず」とあり、誉田別命(応神天皇)・玉依姫命・気長足姫尊(神功皇后)の三柱が今も祀られている。

この神社に伝わる全 600 帖の大般若経は、この地で暮らしてきた先人たちからその心と共に何百年もの間受け継がれているかけがえのない宝である。また、この大般若経は毎年 7 月 26 日に虫干してきたが、平成31 年 2 月から県立博物館に寄託し守られている。

現在も、例祭として毎年7月26日に釈迦十六善神様をお招きし、宮司、役員、氏子崇敬者とともに、国と地域の五穀豊穣、無病息災、子孫繁栄、家内安全を祈念する祭典をおこなっている。





23 中田の棚田と竜王水





棚田の定義は「傾斜が20分の1以上の斜面に段々に連なる田」とされるので紀美野町の田地のほとんどは棚田ということになるが、中田の棚田は傾斜が急で幅の狭い田が階段状に幾重にも並び、約10町歩もある典型的な棚田景観が谷を挟んだ県道から一望できる。

現在およそ8割余が休耕地となっているが、令和元年(2019年)12月に農水省の「指定棚田地域」の指定を受け、

小川地域棚田振興協議会が再生・保全の活動を 始めている。

中田の棚田は、古文書などからその歴史が中世にまで遡ることがわかっており、歴史的に見て全国でも貴重な例であることが明らかにされている。

また、この棚田を支える用水路は竜王水と呼ばれ、源流部には造られたころの様子が偲ばれる素掘りの溝が現在も残っている。

24 梅中傘踊り

小川



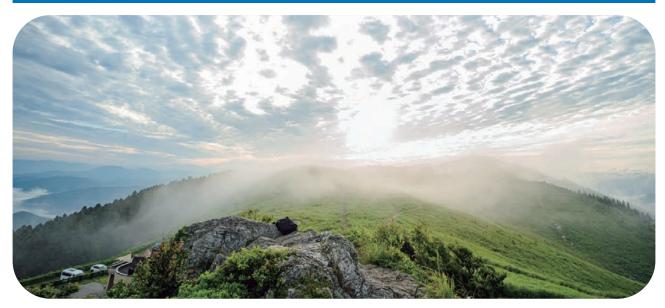
梅本・中田地区に伝わる雨乞い踊りである。 周辺地域の雨乞い踊りは被(かぶ)り笠で踊る笠踊りがふつうだが、「梅中傘踊り」は男女 2人組で1本の和傘をさし、三味線を伴奏に 歌われる音頭に合わせて輪を描いて踊る優美 な伝統芸能である。

江戸時代文政6年(1823年)の大干ばつの際、周辺各地で起きた百姓一揆に小川の農民が加わらなかったことを当時領主であった高野山から褒められ、それを機会にこの踊りが始まったと伝えられている。

昭和 62 年(1987年)に旧野上町の無形文化財に指定され、現在は小川郷土芸能保存会が伝承し地域や 学校の行事で上演されている。

だりきみの人歴史たび

② 生石山



紀美野町と有田川町にまたがる生石山は、標高 870 mで長峰山脈の一部に属し県立自然公園に指定されている。

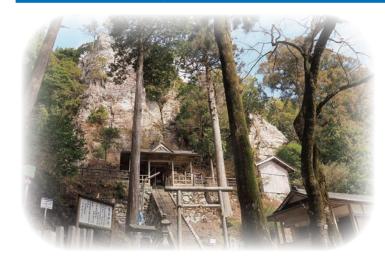
山頂付近は、広大なススキ草原が広がり、昔から四方十国が眺められると言われるほどの眺望である。 山の頂上付近には、笠を伏せたような形の巨岩があり、その形状から「笠石」と呼ばれている。この巨岩は、 弘法大師が置き忘れた旅笠が大きな岩となったものと伝えられる。

また、紀伊国名所図会第三巻の「生石嶺」には、北側にある竜門山脈の主峰竜門山を雲におどる竜に、生石山を谷にうずくまった虎に例える記述がある。

ススキ草原では、毎年春の時期に「山焼き」がおこなわれ、炎が燃え広がる迫力ある光景には圧倒される。 山頂から有田川町方面に下ると、大岩をご神体とする生石(しょうせき)神社が鎮座する。

26 生石信仰

小川



旧東野上・下神野・上神野・志賀野・真国地区には盆明けの頃に「生石(しょうせき)参り」というならわしがあった。これは生石山の生石神社に参って境内のアカガシの枝をいただき、あわせて笠石の弘法大師堂に詣でてススキの穂もいただいて持ち帰り、家の戸口や田の畦に立ててその年の風災封じ(台風除け)とするもので、現在もおこなわれている地区がある。

生石神社のご神体は2つの巨岩で、それぞれ大穴牟遲命・少名彦命の二柱の神であると

され、特に「風除けの神様」として信仰されているところに地域の信仰の特徴が認められる。

また、生石山とその周辺には雨乞いの大火を焚いた火上げ岩や、弘法大師が押しのけたと言われる押し上げ岩などがあり、巨岩への信仰が高野山や弘法大師と結びついた形で残っている。



27 野上八幡宮



野上八幡宮は、永延元年(987年)に石清水八幡宮の別宮となり、祭事は石清水八幡宮に準じておこなわれた。

天文10年(1541年)には、根来寺衆の掠奪、 放火で全て焼失した。その後、僧真賢が各地 を勧進し、16年の尽力で元亀3年(1572年) 年、本殿、若宮を再建した。そして、天正元 年(1573年)には拝殿、武内社、高良社な ども再建した。

拝殿は、桁行五間、梁間四間の本瓦葺きで、 正面と左右に高欄と濡縁をめぐらせ、蔀(し

とみ) 戸は古色で品があり、国の指定重要文化財である。

三間社流造りの本殿は、屋根は緩やかな桧皮葺(ひわだぶき)で、高欄と濡縁は朱と白の彩が雅やかであり、 社伝によると八幡宮信仰の中心として千五百年余りの歴史の重みがある。

摂社の若宮、武内社、高良社は、杮葺(こけらぶき)で木鼻や蟇股(かえるまた)も凝った意匠で彩色された豪華な社殿であり、三社とも国の指定重要文化財である。

絵馬殿は、間□一間、奥行二間の吹き放しで、かつて床張りで舞楽を演じたと言われている。中門の天井 扁額の「八幡宮」の文字は、後一条天皇の御宸筆である。

毎年5月の連体には、社宝である文書、高札、祭礼絵馬などが展示される。また、近年は、県立海南高校 大成校舎、町立野上中学校の生徒が干支を描き、招福開運、大願成就の絵馬を奉納するなど、地域交流がお こなわれている。

28 若山牧水と石本邸

東野上

町役場駐車場に若山牧水(わかやまぼくすい)と野上草夫(のかみくさお)の歌碑がある。

「舟出せむこよひなりしを君がやどにのこりゐ(い)て聞く雨の さやけさ 牧水」(船出するはずの今夜だが君の家にもう一泊する ことになった 雨の音が清々しい)

「大雨はうべこそふりぬみくまのに船出す君をとどむ大雨 草夫」 (熊野へ旅立つ先生を大雨が実にうまく止めてくれたものだ)

牧水は今も人々に愛唱される多くの作品を残した国民的歌人であり、草夫はその門下でのちに野上電気鉄道社長などを務めた石本喜十郎である。大正7年(1918年)5月、牧水は熊野への旅の途中で石本邸に3日間滞在した。この2首は大雨により牧水の出発が遅れた際にやりとりしたものである。

動木の旧石本邸は現在は空き家だが、牧水が泊まった洋室が当時のままに残されており、親族のもとには牧水の2通の手紙が巻物にして保存されている。



29 ヒダリマキガヤ群







普通のカヤの種子



ヒダリマキガヤの種子

ヒダリマキガヤとは、果肉表面と種子表面に左巻き状の筋が入っているカヤのことである。種子の大きさは普通のカヤの 2 倍の長さで、約 4cm になる。

ヒダリマキガヤの群生は全国的にも珍しく、 国内で22本が国、都道府県、市町村の天然 記念物に指定されている程である。紀美野町 にはヒダリマキガヤが55本以上確認でき、 うち13本が平成31年(2019年)2月7日 に「紀美野町のヒダリマキガヤ群」として和 歌山県の天然記念物に指定された。

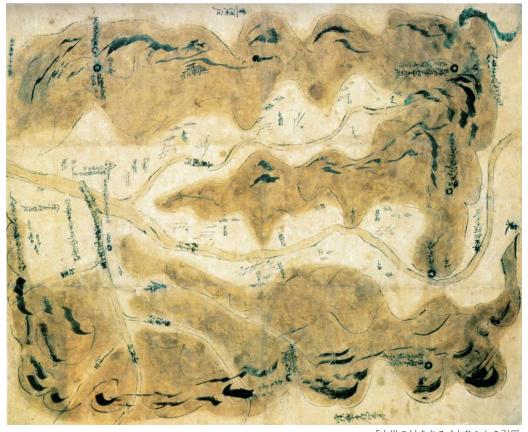
かつて、カヤの種子から絞るカヤ油は、冬場に凝固しないことで高野山の灯明や食用油として珍重され、高野山への年貢や江戸の将軍への献上品として扱われたことが古文書等に記されている。

ヒダリマキガヤの種子は生産性が高いため、 高野山の厳しい管理下に置かれていた紀美野 の地域、特に国吉、毛原地域はカヤ油の一大 産地であったことがうかがえる。

13本の天然記念物のうち、谷地区にある幹囲 3mにもなるヒダリマキガヤは車道から見ることができる。近くには、美里の湯かじか荘やみさと天文台がある。



③ 紀伊国神野真国荘絵図



「中世の村をあるく」P.6 から引用

康治2年(1143年)に神野真国荘園がたてられたときに描かれた荘園図である。国の重要文化財に登録され、現在は京都神護寺に所蔵されている。

残存する荘園図では最古といわれており、絵図には神野村、粟田村、猿川村、志賀野村、真国村、石走村が描かれているほか、十三所大明神(現十三神社)、熊野新宮の社殿と鳥居までもが描かれている。

河野河(貴志川)と真国河が描かれ、支流の梅本河が描かれていて野上荘との境界とされている。

中世の熊野参詣が活発であったころ、上皇の行列の食糧や人馬の調達、運搬を荘園の人々に課せられていて、 久安3年(1147年)の鳥羽上皇の熊野参詣の時には、往路は湯浅の宿まで、復路は近露の宿に持参させた ことが、神護寺文書に記録されている。





③1 町内を通る街道



龍神街道

日前宮を通り伊太祁曽神社を経て、和田川沿いを通り黒岩地区から北野上別院の小池峠越を経て野上八幡宮、曲谷、下佐々、吉野、福田、十三神社から満福寺横を通り、樋下から上ヶ井谷に入って蛇岩明神から遠井辻峠を越えて城ヶ森越えで遠く龍神まで続いたと思われる。人の往来が増えた江戸時代末期から明治 21 年(1888 年)には、黒岩から北野上馬路峠を越える道が開かれている。

真国川に沿った高野街道

熊野古道伊太祁曽神社を起点として、和田川沿いより大河内地区から礫峠を越え、孟子不動から北野上加伊多橋を渡り七山地区、長谷地区、柴目地区の七本松地蔵を経て西野地区に降り、真国川沿いを通って北野、円明寺、勝谷地区から勝谷峠越え、毛原上に下り、長谷神社、泉福寺から、かつらぎ町に入り高野町石道花坂矢立てに到ったものと思われる。なお、加伊多橋を渡り、原野を通り紀美野町動木にある樫河池を越えて柴目地区を通り鳥居峠から西野に下る道もあったようである。釜滝地区にある釜滝薬師を経由して西野に到る道もあったと思われる。また、真国川沿いの道は、貴志川沿いを通る道よりは古いルートであると思われる。

貴志川に沿った高野街道

海南市の藤白神社を起点として、幡川、阪井、木津、九品寺から溝ノ口、野上八幡宮、曲谷から下佐々、吉野、落合、福田、十三神社、満福寺横を通り樋下で龍神街道から分岐して津川口から国道370号線に出て横断して貴志川を渡って再度樋下地区から大角寺原を通り、天拝峠に到り、上神野小学校、赤木から高畑に入り、国吉、毛原、長谷、泉福寺からかつらぎ町に到り、花坂矢立で町石道と合流したと思われる。

国道 370 号線とほぼ重なっている貴志川沿いのこのルートは、江戸時代には高野山への年貢上納をはじめ、物流・交通・情報のパイプであり、高野寺領の行政を支えるこの地域の動脈であった。明治になってから名付けられた道路の正式名称は「花



歴史たび

坂越高野往来(はなさかごえこうやおうらい)」であったが、地元では、「野上往来(のかみおうらい)」、「高野往来(こうやおうらい)」または単に「高野道(こうやみち)」などと呼ばれていた。

いずれにせよ、この道は、明治以降、幾多の改良工事を経て、現在は国道に昇格し、かつての峠越えはトンネルとなって面目を一新して、生活道路としてはもちろん、観光ルートとしての役割もますます高まっている。また、各所に残る旧道には「八町地蔵」をはじめ、江戸時代の高野参詣道の面影が色濃く残った場所も多くある。

現在、国道 370 号線上に「高野西街道」との表示があるが、これは近年名付けられたものである。江戸時代から、堺を起点として河内長野、紀見峠を経由して高野山に到る「西高野街道」という主要な参詣道がある。

32 八町地蔵

その他



「紀伊続風土記」などによると、海南方面から野上・美里を経て高野山に 到るルート「花坂越高野往来」の道中には、かつて八町(約 1km)ごとに、 合計 49 体の地蔵さんが祀られていたという。この地蔵さんは「八町地蔵」 と呼ばれ、高野山を目指す旅人の祈りと憩いの場となっていた。

現在のところ、紀美野町内では、それらしいものが十数体ほど確認されているが、史料で確認できるのは旧美里地区内の3体である。写真は、国吉菅沢にある八町地蔵である。





33 野上電気鉄道





[シュロの林]

野上電気鉄道は、大正5年(1916年)、野上谷の棕櫚(※)製品などを海南市日方に運ぶことを目的に、野上軽便鉄道として日方駅〜紀伊野上駅間の運行を開始した。昭和3年(1928年)には生石口駅(後の登山口駅)まで延伸し、社名も野上電気鉄道株式会社と変更され「野鉄」の愛称で利用者に親しまれた。

昭和30年代には年間旅客数320万人に達し、文字通り地域の動脈の役割を果たすも、その後の急速な車社会の到来により旅客数も減少の一途を辿り、平成6年(1994年)3月、野鉄は惜しまれつつ約80年の歴史に幕を下した。

現在、線路跡は道路や遊歩道として生まれ変わり当時の面影はない。唯一、下佐々地区に当時の2車両が保管され、在りし日の野鉄の姿を垣間見ることができる他、完成することがなかった東への延伸工事(登山口~神野市場間)による橋脚の遺構が5か所今もなお残っている。

※棕櫚(シュロ)は、ヤシ科の常緑樹で南方系の植物である。起源については、有田川町(旧清水長峯山中) で発見されたとか、弘法大師(空海)が唐より持ち帰ったとの言い伝えがあるが定かではない。

江戸時代の頃より漁網用の縄として使用されていたようであるが、明治中期頃から大正にかけて軍需用として縄、綱の需要が増加し、有田地方や紀美野町及び海南市を中心に生産が盛んとなった。

元々古くから、自家用又は小需要用として棕櫚皮で蓑を生産していたが、昭和3年(1928年)頃に海南市の商人がミシン縫い裏防水布を貼り付けることを始め、旧国鉄を主に販路が拡大し、旧美里町下神野に「紀州棕櫚蓑株式会社」が設立されたほどであった。棕櫚原皮の生産地域は旧美里に集中していて、明治8年(1875年)の資料によると多い年で年間236万枚が収穫されている。当時は1000枚で約1円(今の金額で約2万円)で売れ、農家の大きな収入源であったことがうかがえる。

戦後は化学製品の出現により棕櫚産業は衰退していったが、現在でも高級束子や箒を製造する自営業の方が数件あって、全国的にオンリーワンとしての名声を博している。



編集後記

この冊子は、紀美野町内に残る古い建物や趣の深い景観などいわゆる「見どころ」を紹介したものです。 わが町には、明治維新までは野上地区が紀州藩領、美里地区は高野山寺領という歴史があって、それぞれ特色のある風物が残っています。ここでは、その中で気軽に訪れやすいところを選んで、簡単に解説しています。

現在の私たちの日常は、全世界のできごとが瞬時にわかり、スピードと効率が重んじられ、日々の暮らしも極言すれば「早送り電脳文化」の渦中にあります。身辺を振り返るゆとりもなくなり、天災や戦争など過去の貴重な教訓さえ忘れられがちな風潮もあるようです。

こんな日常の中ですが、ここらで一服してふるさとの豊かな自然に身を置き、ご先祖や先輩たちの暮らしの足跡をたどってみるのはいかがでしょう。ゆるやかな時の流れの中で先人たちがどんな道をたどってきたのか、そして私たちはこれからどこへ行こうとしているのか、この冊子が、皆さんの「温故知新」の思いを巡らすよすがとなってくれることを、編集者一同心から願っています。

○参考文献

| 出版物名 | 著者・編者 | 発行 | 出版年 |
|---------------------------------|--|----------|------|
| 「野上町誌」上・下 | 野上町誌編さん委員会 | 野上町 | 1985 |
| 「美里町誌」史料編Ⅰ・Ⅱ | 紀美野町美里町誌編纂委員会 | 紀美野町 | 2007 |
| 「特別展 中世の村をあるく - 紀美野町の歴史と文化-」 | 和歌山県立博物館 | 和歌山県立博物館 | 2011 |
| 5.V.— | ************************************** | ** | 400= |
| 「美里ななくさ」 | 美里ななくさ編集委員会 | 美里町 | 1987 |
| | 実里ななくさ編集委員会 安藤精一 | 美里町 | 1987 |
| | | | |
| 「和歌山県の文化財」第2巻 | 安藤精一 | 清文堂出版 | 1981 |

○掲載文献

| 出版物名 | 著者・編者 | 発行 | 出版年 | 記載頁 |
|---------------------------------|-------------|----------|------|---------------------------------|
| | | | | P.6 (神野真国莊絵図) |
| 「特別展 中世の村をあるく - 紀美野町の歴史と文化-」 | 和歌山県立博物館 | 和歌山県立博物館 | 2011 | P.54 (弘法大師像) P.120 (御田春鍬規式 古写真) |
| | | | | P.172 (小川八幡神社の大般若経虫干) |
| 「美里ななくさ」 | 美里ななくさ編集委員会 | 美里町 | 1987 | P.48 (真国 御田「春鍬規式」) |
| - 「和歌山県の文化財」第2巻 | 安藤精一 | 清文堂出版 | 1981 | P.13 (十三神社本殿) |

ぶらり・きみの歴史たび

発行日 令和4年3月31日

[編集・発行] 紀美野町まちづくり推進協議会 紀美野史発見部会

赤阪 惠子

西浦 史雄

森下 誠

中谷 澄雄

山中 正史

丸谷 栄彦

中屋 多加志

紀美野町役場まちづくり課 紀美野史発見部会事務局

[アドバイザー] 地域おこし協力隊 行年 恭兵

[イ ラ ス ト]すけの あずさ[印刷]三和印刷株式会社

当ガイドブックは、和歌山県の「令和3年度地域・ひと・まちづくり補助事業」を活用しています。

がらりきみの心を史たび